

転倒して救急搬送された女性の傷を縫合する松岡さん。  
やさしく声をかけながら手早く処置する。

# 絶対に断らない。 それが救急医です。

救急医の松岡良典まつおか よしのりさんは久留米市出身。2013年3月、妻の故郷の鹿児島で、全国でも珍しい救急専門クリニックを立ち上げた。24時間365日の救急診療に加え、日中は地域のかかりつけ医として外来診療も手がける。開業のきっかけ、救急医を志した理由、鹿児島の医療の課題について話を聞いた。

「超人的」。松岡良典さんの働きぶりを見た人は誰もそう思うだろう。松岡さんは南九州市川辺町にある松岡救急クリニックの院長を務めている。24時間365日、救急車を受け入れるクリニックだ。救急搬送は1日2件〜5件、2014年度の受け入れ件数は697件にも上った。

## 救急と発症予防の機能を備えた病院

まさに命の危険が迫っている患者と相対する救急医。救急医に求められるのは「絶対に断らないこと」と松岡さんはいう。「専門外だから診られない、という言い訳は自分には許されません。新生児から高齢者、軽症から重症患者まですべて受け入れ、必要があれば手術もします。麻酔専門医の資格があるから手術までできるんです」

仕事は救急だけに留まらない。

外来診療も行い、風邪などの患者にも対応する。2014年度の外来患者数は1日平均150人、合間に入る手術は年間500件以上に上った。現在、松岡さんの他に2人の医師がいるとはいえ、負担は小さくない。それでも地域のかかりつけ医として病気を予防し、日常的なケアを提供して症状改善を助けるのも大事な仕事だと松岡さんは考えている。「救急をやっていると残念なのは、手遅れとなって搬送されるケースが非常に多いこと。救急は大事ですが、予防はもっと大事です。地元で質の高い医療を受けられるよう専門外来を充実させ、運動療法や食事療法を提供するデイクエア施設と薬膳レストランも準備しています」

## 責任をもって治すのがプロの救急医

鹿児島の医療の課題を松岡さん

うかがった。「鹿児島ではいまだに、自分の専門外は診ないという習慣が根強い。しかし、救急の患者さんに自分で医師を選んでいる暇はない。だから『たらい回し』が起こってしまう。これを解決するには、救急科専門医を増やすことです。救急科専門医は全国に4千人強と少ない上、鹿児島県の救急科専門医はたったの35人（2015年1月1日現在）。これは危機的状況です。少なくともこの10倍は必要でしょう」。松岡さんの考えるプロの救急医は、的確な診断を行い、最後まで治すことができる医師を指す。「最後は専門医に任せればいい」となると救急医全体のレベル低下を招きます。説得力のある診断をし、最後まで責任をもって治すのがプロの救急医です」。その言葉ど

おり、松岡さんは麻酔・救急・集中治療を中心に、全部で8つの専門医資格を取得している。

自身の勉強に加え、後進の指導や地元の消防組合との勉強会にも余念がない。「助かる人は誰がやっても助かるし、助からない人は誰がやっても助からない。ただ、努力次第で助かるグレーゾーンの患者さんは私たちの努力で救える可能性が高まるんです」。もともとやりがいを感じるのには、心肺停止などといった重症患者が助かった時だという。「人づてに患者さんが元気になったと聞くと、本当に良かったと思いますね。これ以上のものはありません」。松岡さんの体調を心配する声もあるが、本人は笑顔でこう答える。「週休2日とはいきませんが、きちんと休めていますよ。休



この日の救急搬送は2件。外来診療を遅らせて対応していた。



外来診療と救急の合間に手術も行う。手術はすべて院長である松岡さんが執刀。

Focus ON  
Vol.26

Yoshinori Matsuoka 松岡 良典

日は子どもたちや妻と過ごすのが  
楽しみなんです」

## バイク事故を目撃し 救急医の道を選択

幼い頃の松岡さんは体が弱く、病院に行くことが多かった。自然と医師を志すようになり、医学部に進学。学生時代はボクシングに明け暮れ、勉強は二の次だったそうだ。「かつこよくて、きつくなく、自分の時間が取れそうという理由で法医学専攻を考えていました。どこにでもいる大学生と同じです」と松岡さんは笑う。

救急医を志したのは大学5年生の時、目の前で起こったバイク事故がきっかけだった。近くのクリニックから医師が駆けつけたが、うろろするばかりで何もできなかつたという。「そのうち救急隊が到着し、てきばきと処置をしてけが人を搬送していきましたが、後日花が供えられているのを見て亡くなったと知りました。命の危機が迫っている時に適切に処置できるのが本当の医者ではないのか、このままでは中途半端な医者にならないと、そこで180度方向転換したんです」

その後、肉体的にも精神的にも過酷といわれる救急医をめざして勉強を始めた松岡さん。救急では、

多領域の知識・技術を効率良く身につける必要がある。松岡さんは通常の何倍ものスピードでそれらを習得すべく、膨大な数の救急患者を診察し、治療の合間には昼夜を問わず勉強に励んだ。

「目の前の患者だけを診ていては助けられる人数は限られる」と考え、卒業後は救命救急センターに勤務しながら大学院に進学し、研究にも従事。新しい造影剤を開発し、国際特許を取得した。こうした実績が買われ、32歳の若さで佐賀大医学部附属病院の講師に就任。集中治療部門の副部長としても活躍した。



ひざの痛みを訴える患者にも画像や模型を見せながら丁寧に説明。「患者さんと真剣に向き合い、説得力のある診断・治療をすれば患者さんはついてきてくれます」

## 医師になった 原点に立ち返りたい

そんな「出世コース」を離れ、開業したのはなぜか。「大きな組織にいた救急医としての自分が薄れていく気がして。医師を志した初心に戻って開業しました」。クリニックのある南九州市川辺町は、松岡さんの妻の出身地・枕崎市から車で30分ほど。病床過剰地域でありながら、夜間や休日には市外の病院に搬送される患者も少なくなかった。松岡さんは、薩摩半島の中央部にあたる川辺町で開業すれば診療圏が広がり、多くの患者を助けられると判断。全国的にも珍しい最新機器を導入し、手術室を完備。的確な診断で病気を早期発見し、治療までできる体制を整えた。



佐賀大講師に就任した頃の松岡さん(中央)。次第に救急の現場から離れることに疑問を感じるようになる。

松岡さんは2015年4月から鹿児島大学医学部の非常勤講師としても活動している。研修医や医学部生を受け入れ、現場で彼らを指導する。2015年9月には山口県美祿市に、松岡さんの考えに共鳴した医師の救急クリニックが開院予定だ。救急のニーズがありながらも受け入れ先のない地域は

全国各地にある。救急医を増やし、救急クリニックを中核とした新しい医療ネットワークをつくり上げたいと、松岡さんの奮闘は今日も続く。「しばらくは厳しい状況が続くと思いますが、救急医が増えれば状況は改善するはず。総合病院規模の医療を個人でできる救急クリニックを広め、逼迫している地域医療を助けるモデルケースとして発信していきたいと思っています」

### PROFILE

松岡良典(まつおか・よしのり)  
1979年福岡県久留米市生まれ。佐賀大学医学部卒業。2010年九州大学大学院医学系学府機能制御医学専攻博士課程修了。医学博士。九州大学病院救命救急センター勤務、佐賀大学医学部附属病院麻酔・蘇生学講師、同集中治療部副部長などを経て、2013年3月松岡救急クリニック開院。日本救急医学会専門医、日本整形外科学会専門医、日本脳卒中学会専門医、日本集中治療医学会専門医、日本整形外科学会認定リウマチ医、日本麻酔科学会認定医、厚生労働省麻酔科標榜医、日本医師会認定産業医。ウェブサイト <http://matsuokaqq.com>